

て開かれてゐるのを知りながら尙老人の様に過去を顧る事が嬉しい、なつかしい。醇化された美化された過去だからである。今、私はもう歴史にくり込まれた舊校舎の影を抱いて泣いてゐる。亂雑に積まれた古い材木、白い土、いさゝかの濕り、みんな古い記憶である。頽された悲しみに慄へてゐる。うす蒼い星の明りが、頼りなく立つてゐる講堂を照しておぼろに。其中には此校舎が建てられた當時またゝいた光が、今この淋しいあさを照すのもあらう。明治の初め泰西の文化をうけて、後の宮の輝く御手に開かれた學校はどんなに美しくあつたらう。知に飢え光明にあこがれた若い人達は、どんなに眞面目に、どんなに目ざましく、自分達の爲に開かれた道へ進んだことであらう。かくて四十年、私達を最後として澤山の若い人を育んだ校舎は、つひに弱りきつた身体を、小さな模型を残して安らかに無に歸して了つた。

しみに打たれてこゝに立つてゐる。武田先生は日々頽される校舎を佐々木病院の二階から身を切られる様な思ひで眺めていらしたときく。そして先生はたまに悲しさに泣きながら運命を共にせられた。私達は永久に永久に頽されたる校舎を忘れないであらう。秋が来て歸校した私達の目にこの頽された光榮がどんなに傷ましく寫つたであらう。秋の都もまた緊張した氣分を與へた。併しその半面に齎す悲しみは否定する事は出来ない。毎日毎夜、新たな頁は幾枚か繰返された。悲しみはまぎらされる事なしに、際だつた鮮やかさを以て迫る。かうして私達は緊張を表とし、悲しみを裏とした袷をきて、秋が来たを意識しながら秋の生活にのつてゆく。

◎そぞろありきて (文四のひこり)

お茶の水橋下の線路のあたりにて一工夫が昔は白なりしとも思はるゝ手袋を片方ぬぎて首をかしげつ、つく／＼と眺め居候。見れば油と塵に汚れ指先の方など眞黒に光りて電げに垂れ下が

り居るにてやがて又元のまゝにはめて仕事にかゝり申候。さぞその用ひ心地あしき事にて候はんをこの手袋一つをも捨てかぬるこの工夫發心すれば雲上の椅子百萬の富をも捨てえたる昔人を如何に羨み居る事と哀に存候。

或る友の語り申候ひき

こみたる電車の運轉手臺に乗り居たる或時にて候。進みゆく先の新見附下のトンネルが高さ三尺足らずに見え候がやがて七十余人を乗せたる電車が走りすぎ候ても煉瓦一つ動さず候ひき(動しては大變に候へ共)手近にあるものは大に遠方にあるものは小に見する間違ひたる人間の眼は時として眼の所有者たる自己を無限に廓大して人間中心説、自己中心思想なども起さしむるとも少からず候。自己の些細なる利害問題より外に考へられぬ人人はこの種の病的なる眼を有する仁と存候。同情に堪へず候。このむき専門の醫も出で候は、吾人は誠に幸福に候はむと。

同情する者は弱者に候

田舎道にての事蚯蚓が半分に踏みちぎられて砂

にまみれて怒つて居るを見受け申候。さぞ無念の事と察せられて頻死の彼に一掬の涙を惜みえず候ひき。さばれ思へば踏まるべき地に身を横へて踏まれしを怨むは此方の無理にや候はん。梢の紅籬の菊にこそ行人も眼を止め候はめ。土を食ひて地に住む一小生物は踏まるゝが當然の悲惨なる運命を持ちて生れし者と存せられ候。同行の友七八人この爲に心を附けしは一人も之なく候ひしを他事ならず心動かせし我身は或は彼と同様の星に當れるにやと最後にまた我爲に悲しみ申ひきと薄幸の友は我前に三度涙を拭ひ申候。より確に生き度候

大正二年も暮に近づき申候何處の巷も年を送り年を迎ふる準備戦場の如く劇しく行はれ居候。かゝる世の中に生きようとあせる又生きてると云ふ自覺もなしにふら／＼と廿年を送り來し身がこゝに立ちて初めて明に顧みせられ申候一人住めば社會はそれだけ狭まるべく他の人はそれだけ迷惑を蒙るは當然に候故に此社會に住む人は須くベストを盡して我が社會に與ふるその迷

惑を償ひ更に我生存を意義あらしむる爲に進みて社會に貢獻する所なかるべからざるにて候。されは萬一極力なほ其身が受くる恩恵を償ふに足らざる人は如何致すべき道德はなほ自殺を罪惡と宣言致し候や。君は民の爲に憂ひ親は子の爲に苦しむ吾人の生の立場を相對的に求むるは一般の場合として不可能の様に存せられ候。然らば吾人は何が故に生きざるべからざるか。常々吾人の所謂道德は「人は死なざるべからず」と假定してさて萬人が互にそこに到達すべく都合よき方便を東西古今の經驗に徴して造り上げし一大道路に候この道路を安んじて進むには其目的地點即ち生の立場を明に認知せざるべからず候。而して今世にすむ人盡く之を認知せるや否

やは疑問に候。少なくとも我自身は我眼の不明をかこち居候。なほ日々の見聞に依れば其目的地點を見えざるが爲に或は道に倦み或は困難に撓みて道德の謀反者となれるも之ある様に承知致し候。今その電車道路が幾多の工夫のツルハシも破壊せられ居るを見てもこの人生の大道の前途おぼつかなく存せられ候。早くこの道をしてたゞに方便たるに止らずオーソリチーたらしめ道を保全し人を救ひ度くと存候絶對なるべき人生の目的地に松明かゝげて之を明むる人は誰にか候はん。生意氣とお笑ひ下さるまじく一寸の虫にも五分の魂と申候へばあなかしこ。以上去つてはならぬ通れてはならぬ苦界にもかく弱者より申上候 Y 様に。

戦ひを好まず、狭き孤獨の安快により生活を馴致したる國民は、遂に男らしき、冒險的なる性質を失はざる、他國民の前に拜跪すべきのみ。  
ルーズベルト。(奮闘的生活)

報 録

◎第廿六回文科學術談話會

大正二年十一月八日午後一時より例の如く談話會を開催す。文學博士福來友吉先生を聘して一場の講話を請ひ得る所多かりき。講演順序左の如し。

- 一 開會の辭 岡田 先生
  - 一 ハーバード大學副總長の講演をよみて 文四 齋藤たまを
  - 一時と人格 福來 先生
  - 一 日本の傳説 文二 川上 靜江
- 福來先生の御講話は暗澹たる現代思潮の渦巻の中に處する我等にとりて一道の光明であり指導であり確信であり又覺悟である。うれしく承る。午後四時半閉會。

◎第六回會計報告

自大正二年六月廿七日  
至大正二年十二月一日

收入	金七拾壹圓〇六錢
内譯金	三拾四圓〇五錢
前より繰越し金	金貳拾壹圓拾五錢
會員よりの會誌代	金四拾六錢
銀行利子	金拾五圓四拾錢
贊助員十七人分會費	支出 金四拾圓八拾五錢
内譯金	參拾壹圓九拾錢
六號印刷代	金參圓
會誌送料	金四圓五拾貳錢
廿七回例會費用	金壹圓四拾參錢
其他の雜費	差引殘金參拾圓貳拾壹錢也